

ハウエンにてチャンピ
オンを目指す

轍__

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

気づくとハウエン地方ミシロタウンの家庭にいた主人公が、チャンピオンを目指し旅立つ。

ポケモン世界の謎理論、何故か旅に同行する者など、頭を悩ますことばかり。

——果たして主人公は無事チャンピオンになれるのか？

目次

プロローグ	1
第1話 旅立ち 黄色い悪魔？ 白い天	
使？	10
第2話 才能	25
第3話 切っ掛け	40

プロリーグ

『本中継はホウエンリーグ・サイユウ大会初日Aブロック1回戦、前回チャンピオンのダイゴ選手と大会初出場カイリ選手の試合になります。』

えー、今大会のルールは例年どおりとなってます、リーグ出場者の登録ポケモンは9匹。選手はそこからポケモンを選び3on3のシングルバトルを行うことになっています。そして技の数はポケモン1体につき4つまでの制限がかけられています。技は毎試合変更可能です。

これからの1カ月にも及ぶ激戦を制して今大会のチャンピオンにかけ昇るのは誰なのか。将又ダイゴ選手の二連覇なるのか！ 注目したいところです』

夏のじめじめとした暑さが身に沁みるこの頃。

俺はウインディを枕にテレビを視聴していた。

「ミキ。ちゃんと座って視なさい」

台所で洗い物に勤しんでる母さんがこちらを一瞥して咎めた。

俺は仕方なく横たえていた体を動かしてきちんと座る。

——ポケッタモンスタ——

縮めてポケモン。

前世で結構な人気を誇ってたコンテンツだ。

俺もポケモンは大好きで幼い頃から新しいシリーズが出る度にやっててポケモンを厳選して育成それから対人戦までのめりこみ楽しく遊んでたのを覚えている。

でもこの世界は種族値や努力値が存在してるのか怪しい。

それに技の効果もゲームと違うみたいだ。

というのもピカチュウが種族値と努力値を鑑みてもおかしな強さだったり。

そのピカチュウのどんこうせつかがボンラッシュに先制できなかつたり。

更にアンコールが相手の次の行動だけを同じにしたり……

とにかく前世でやったゲームの知識はある程度の基準にしかないようなのだ。

その前世の知識もポケモンから離れ長い時が経つたのでぼんやりとしている。

この世界の住人としてありえない考えを巡らせてる俺の前世は日本人大学生。

日中は教授から頼まれた雑用と大学の授業や課題をこなし夜はバイトか友達付き合
い。

そんな日々を送ってた。

俺はいつものように深夜くたくたになって帰宅そして就寝した。

……前世の記憶はそこまでで途切れている。

たぶん寝てる間に逝ったのだろう。

前世の記憶は今のこの体が5歳の頃に思い出した。

最初は自分がもう1人いるような違和感を感じたけど時が流れた今となっては最初にあつた自我と前世の記憶が混ざりいつのまにか馴染んでしまった。

居間のテレビが会場の大型ディスプレイを映す。

そこにはダイゴさんとカイリ選手の顔写真が表示されていた。

でも試合が始まってない現在は両者のポケモンを伏せている。

試合中にはポケモンのHPゲージや状態が会場の大型ディスプレイに表示されその情報はテレビ画面上部にも映される。

どうしてこんなことができるのか疑問を持った俺は父さんに訊ねたことがある。

父さんは何故か嬉しそうに教えてくれたが前世の記憶を持つ自分には全く理解できない謎技術だった。

一応当時の俺は理論はともかくそういうものだと無理やり納得して父さんの熱弁に頻りにうなずいた。

その行動が崇つてしまったのか調子に乗った父さんは関係のない知識も披露し始めモンスターボールの仕組みについて語ってたけどこれも前世の理屈が全く通用せず頭

を抱えなくなった。

そんなことより試合の方だ。

前回チャンピオンのダイゴさんが戦うホウエンリーグ初戦。

今大会の行く末を占う上で重要な1戦になるだろう。

だから当然ダイゴさんは本腰入れて勝ちにいくはず。

相手は初出場だが厳しい予備予選を勝ち上がった猛者。

いくらダイゴさんでも手を抜いて勝てる相手ではないと思う。

両選手は既に草のバトルフィールドの端に着いていた。

対峙した2人はモンスターボールを持ち互いを見据えている。

選手の準備を認めた審判が「バトルスタート」の合図を送るとフィールドへモンスターボールが投げられた。

モンスターボールが空中で開くとまばゆい光と共に両選手のポケモンが晒される。

ダイゴさんが最初に選んだのはエアームド。

対するカイリ選手のポケモンはムウマージ。

テレビ画面上部に両選手のポケモンが開示されHPゲージと状態が表示された。

モンスターボールから出たエアームドは飛び上がりながら針岩をバラ撒く。

それが敵のポケモンを囲んで浮遊した。

ムウマージは顔に不敵な笑みを浮かべその場から動かない。

エアームドはステルスロックでムウマージがわるだくみかな。

両選手共に最初に選択した技は攻撃技ではなかった。

おそらく思索は同じで自分有利な状況へ運ぼうとしてるのだろう。

エアームドは大きく翼を広げ上空にて旋回。

それを受けてムウマージは上空へ電気を球状に圧縮して打ち出す。

その攻撃はエアームドの進路上に入っていたがエアームドは体を傾げるだけでラクとかわした。

試合は均衡状態に陥った。

会場の視線が集まり息をするのも億劫な時間が過ぎるなか漸く両者動きだした。

それはまるで映像を早送りにしたかのようだった。

旋回していたエアームドがムウマージの真上につくと突然広げていた翼を畳み螺旋を描きながら真下へ突っ込んだ。

後手に回ったムウマージは迎撃態勢に入り上空から自身に迫り来る弾丸へ雷光を幾筋も絶えず放った。

しかしエアームドにあたらない掠りもしない。

距離は縮まり遂にエアームドがムウマージを捉えた。

勝負は一瞬にしてついた。

エアームドが無傷で上空を飛び回り勝ち鬨を挙げていた。
一撃

たとえダイゴさんのよく鍛えられたエアームドだろうと素の攻撃力ではカイリ選手のムウマージを一撃で戦闘不能にはできない……と思う。

エアームドが最後の攻撃へ移る前の旋回。

あれは様子見だと思っただけどつるぎのまいだったのかな。

それと最後の場面に到ってはムウマージの10万ボルト？　がエアームドに掠りもしなかった。

状況を的確に読んで下した判断とポケモン自身のパワーにスピードその2つを踏まえるとダイゴさんは全体的に隙がない。

会場が今のバトルにどよめいてる。

みんな最初のバトルがこんなあっけなく終わるなんて思ってもみなかったのだろう。俺もそうだったし。

カイリ選手はフィールドにうずくまるムウマージをモンスターボールに戻し次のボールを選び取る。

その選び取ったボールを額にあて目をつむりしばらくそのままの状態で動かなくな

る。

どうにか落ち着こうとしてるのか彼女の容姿と相まって絵になった。

会場では次のバトルが始まる気配を感じたのか喧騒が絶えた。

カイリ選手は漸く目を開きダイゴさんをしっかりと見据えモンスターボールを持った腕を勢い良くふるった。

流麗なフォームだったが最初の勢いやキレが嘘のようだった。

バトルはダイゴさんが手持ちポケモン3匹残しての勝利に終わった。

圧勝だった。

最後のバトルではカイリ選手のチラチーノがダイゴさんのサザンドラを追い詰めていた。

しかしダイゴさんにとって危なかったのはその場面のみで全体的に危なげなく試合を畳んでしまった。

テレビは映す両選手フィールド中央に歩み寄り握手を交わすその場面を。

厳しいホウエンリーグの予選を潜り抜けてきたとはいえリーグ初出場だから経験が足りなかったのかな。

カイリ選手が悔しがり俯いた。

その姿を見てみると彼女にすこし同情してしまう。

リーグ初出場初戦に前回チャンピオンとあたるなど不運としかいえない。

試合後半には持ち直していたので尚更そう思った。

カイリ選手がポケモンの能力や駆け引きに於いて最初から最後までダイゴさんに力の差を見せつけられてしまったのは確か。

それでもポケモンはよく鍛えられた。

駆け引きも時々だったけどダイゴさんに劣らぬ指示をだしたりしてた。

そんな悪くない試合をした彼女が負けた理由を挙げるとするなら、相手が悪かった

“この一言に尽きると思う。”

試合をみて彼女がブロック抜けする実力があることは何となくわかった。

この敗戦を引きずらなければいいけど……

ダイゴさんには負けてしまったがカイリ選手の挑戦的な自分から仕掛けてく戦術は好みだ。

Aブロックを突破して決勝トーナメントに進んでほしいな。

そうなったら試合数が増え彼女の戦いを長いあいだ見ることが出来る。

応援の甲斐なくカイリ選手は2戦3戦と負け続けてしまい早々にブロック敗退を喫してしまった。

それでも彼女は最後の試合となる4戦目を勝利で飾る。

対戦相手はブロック抜けを決めた選手だったが彼女は2戦3戦目とは違って対戦相手にバトルの駆け引きでことごとく勝ち別人のような試合を展開して簡単に勝利を手に入れてしまったのだ。

あまりに呆気なくカイリ選手が勝ったので対戦相手であるカゲツ選手が手を抜いたのかと勘ぐった。

理由として彼はAブロック突破が決まったた。

けれど画面越しの彼の表情は温存して負けた訳でないと語っていた。

第1話 旅立ち 黄色い悪魔? 白い天使?

時は流れ。

俺は暖かな陽射しを浴び自宅前に立っていた。

「ミキ。本当に行つてしまふのね」

「うん。ごめん……」

母さんには小さな頃から10歳になったら旅に出ると常々言っていた。

でも出発する今になつても母さんは俺のことが心配らしい。

俺の体は10歳だし心配されるのはあたりまえなことだと思う。

それでも……。

俺は好奇心に勝てなかった。

「時々顔見せに戻つてくるよ。たまには連絡もするからさ」

気休めかもしれないが俺はとつさに頭に浮かんだ言葉を呟く。

俺の言葉を受けた母さんは笑んだ。

でも表情が思ったとおり晴れてなかった……。

「ちゃんと準備はした？ 体調は？」

寂しそうに言つて母は俺を強く抱きしめた。

「大丈夫」

俺はされるがままで母の温もりが体を包む。

「ウインディちゃん。ミキをお願いね」

母が抱擁をとき俺のかたわらに座るウインディを撫でた。

尻尾を振り気持ち良さそうに目を細めると任せろと表明するように「ワウ！」と一声吠えた。

俺は「じゃあ」と母に背を向け歩く。

後ろから母が「がんばってねミキ！ ……お父さんによろしくね！」と言う声が聞こえた。

もちろん！ 説教してやる。

好奇心に勝てず母さんを一人にする俺がなにをと思った。
しかしそれでもあんまりだ。

仕事が忙しいからって長いこと連絡すら寄越さないのは。

俺は申し訳程度に軽く手を挙げふりかえることなくオダマキ博士研究所に向かった。

オダマキ博士研究所に着いた俺は目的を果たすため門のベルを押した。

しかし暫く待ってもオダマキ博士が出て来ない。

俺は隣のウインディと顔を見合わせたあと仕方なく研究所の敷地に入った。

「オダマキ博士。ミキです。ポケモン図鑑を貰いに伺いました」

何度かドアを叩き呼びかけると研究所の中からドタドタとせわしない音が聞こえやつとドアが開いた。

「おおミキ君。こんな朝早くからどうしたんだ。さき。中に入って」

今起きたのだろう目はしよぼしよぼ髪はボサボサのオダマキ博士が顔を覗かせた。

俺は笑みを堪えて「お邪魔します」と断り研究所に入った。

研究所の中は研究に使うのだろう機材や書類でごった返していた。

オダマキ博士は中に籠って研究する性分ではないしフィールドワークが多いから片付ける時間もないのかなと思いい見なかったことにする。

そしてここに来た目的を早々に果たすことにした。

「博士。お久しぶりです。来て早々ですがポケモン図鑑を頂けませんか」

「ん? そうだったそうだった。そういえば今日渡す約束だったね。ちよつと待っててね」

研究所に入る時にも思ってたけど……もしかして博士は今日の約束忘れてた？

もし博士が覚えてなかったらフィールドワークの多い博士が研究所に居なかったかもしれない……。

なにはともあれ居てくれて助りました博士。

いえ本当に。

俺がそんな事を考えてる間に博士は机の上をゴソゴソと漁りその中からポケモン図鑑を引っ張り出していた。

「ミキ君。これが君に渡すポケモン図鑑だ。一応貴重な物だから大事に扱うように」
「ありがとうございます」

博士からポケモン図鑑を受け取った俺は繁々と図鑑を観察する。

掌に丁度良く収まるサイズ。

前世の記憶にある折りたたみ式携帯電話に似た形状だった。

ポケモン図鑑は博士宅にお邪魔した時にたびたび触らせてもらったから使い方もわかる上に見慣れてもいる。

それでも自分の物として手に持ったポケモン図鑑は特別そんな気がした。

「本来ならポケモン図鑑と一緒にポケモンも一匹渡すのだが君にはウインディがいるしなあ……」

博士は困ったように呟いて俺の傍らのウインディを見る。

「博士。お気遣い結構です。俺には頼りになるウインディがいますから」

俺が誇らしげに言うとうインディは澄まし顔で博士を見返した。

ポケモントレーナーは1匹のポケモンと共に旅立つという暗黙のルールがある。

まあ昔から続けていることなので習慣化して今も続けているだけっぽいけど。

「うーん。でもなあ……そうだ。ミキ君少し待ってたまえ」

博士は思案したあとと急いで二階に上がって行きタマゴを抱え下りてきた。

「ポケモンの代わりになるがこのタマゴを渡そう」

俺は差し出されたタマゴを両手で受け取り「いいんですか」と確認した。

「知り合いから貰ったんだ。でも正直扱いに困ってるね。厄介払いみたいだが貰ってやってくれないか。もう少しで孵るはずだ」

「そういう事でしたらありがたく頂戴します。では博士。慌ただしくてすみませんがそろそろ失礼します」

「困ったことがあればいつでも連絡しなさい」

「はい。その時は遠慮なく博士を頼らせてもらいます」

俺は顔に笑みを浮かべタマゴをバックバックに先ほど貰った図鑑をジャケットの胸ポケットに仕舞った。

オダメキ博士研究所を後にした俺達はコトキタウンまで続く道101番道路を眺めていた。

見渡す限りの草原が一带に広がり俺の足元から抉ったように一本の道が延びていた。

この風景を眺めると長く過ごしたミシロを発つのだという実感が湧いてきた。

区切りだし何か話すか。

こういう事はちゃんとしないと。

独白を頭に浮かべ自分で自分に言い訳してる状況に気恥ずかしく感じながらも口を開く。

「ウインディ。俺達は今から旅に出る。これからは誰の助けもないだろう。でもお前はいつも俺の傍にいる。俺もいつもお前の傍にいる。だから一緒にホウエンチャンピオンの座に駆け上がるよ」

なにをいまさら当然だと示すようにウインディは俺を置いて先に行ってしまった。

せつかく人が照れくさいの我慢して語ったのにこれだよ。

いつもと変わらぬウインディに思わず苦笑してしまふ。

バックパックを背負い直し気を引き締める。

そして俺は頼もしい彼の背を追いかけた。

俺達が歩む道は地平線まで真っ直ぐに続き太陽が中天で爛々と輝いている。

朝の日差しを感じて俺は寝袋から這い出た。

重い脛をこすりながらテントの中から顔を出し暫く空を眺めたあとテントから出て伸びをし体を解す。

予想通り地面の上は固く寝袋に包まっても寝心地が悪かった。

うらめしく思いテントの中の寝袋を見やり隣に寝てたはずのウインデイがいないことに気づいた。

……朝の散歩に出掛けたのかな。

俺が朝食を用意していると計ったようにウインデイが林の奥から出てきた。

匂いに釣られてきたなとウインデイにジト目を送る。

朝食のメニューは俺に缶詰パンをウインデイには肉中心のポケモンフード。

自分で準備したとはいえ何とも味気ない。

因みにウインデイの食べ物だけは家にいた時と変わらない。

俺がそもそもと味気ない朝食を片付け隣のウインデイはガツガツとうまそうに食べ

る。

食事の格差を感じてたら黄色い影が警戒しながらこちらに近寄って来た。

ピカチュウ？ めずらしいな……

この世界のポケモンの分布ではホウエンにだけ生息してるポケモンはいない。

元来ホウエン地方に分布してるポケモンの生息数が圧倒的に多いのだが他の地方に生息してるポケモンは数こそ少ないもののホウエン地方にも分布してるのだ。

そういえばあの原点にして頂点なレッドさんがピカチュウを所持してる。

そのレッドさんというとチャンピオンの座を自ら返上して引退したあとシロガネ山に籠ってしまった。

なぜカントーチャンピオンの座を返上して山に籠ったのか。

それはレッドさん本人のメディアへの露出が少ないことが災いして終ぞわからなかった。

噂ではリーグ上位者がわざわざ出向いてレッドさんに挑戦してるらしい。

レッドさんは地方間のリーグでも二連覇だったし腕に覚えがあるなら自ら足を運んでも手合わせしたいだろうな。

警戒しながら鼻を動かしこちらにじりじりと近づくとピカチュウ。

でも生憎モンスターボールの持ち合わせがない。

ミシロでは販売してる施設がなかったから仕様がない。

俺は手に持つてるパンを少しだけ千切り目の前へ投げてやった。

ピカチュウは俺達を視界に収めたままパンに近づき匂いを嗅ぐ。

用心深い。

野生だから当然か。

安全を確認したのかピカチュウはパンを啜えて走り去ってしまった。

ウインディはピカチュウの一連の行動を見てたが気にしたそぶりもなく我関せず

自分の食事を続けていた。

我がポケモンながら図太いことで。

背の高い草をそよそよと撫でる風。

ミシロを発った時と同じく辺りには草原地帯が広がっていた。

俺とウインディは101番道路をコトキタウン目指し歩んでいる。

俺が平穏な道をのんきに堪能していると不意にウインディが立ち止まった。

怪訝に思いウインディを仰ぐ。

するとウインディは道の脇の草叢を睨みつけうなり始めた。

様子を見る限りどうやら何かがちらに向かつてるらしい。

何が来るのか今か今かと待ち構えてると漸くウインディの警戒の元が姿を現した。

——ジグザグマ

焦げ茶色と象牙色その2色で段を作ったギザギザな毛並み。

顔にはアイマスクを思わせる特徴的な黒い模様。

そこに配置されたこちらを見る目は何故か好奇心があふれキラキラ輝いている。

朝に見たピカチュウとのあんまりな違いに確認のため胸ポケットのポケモン図鑑を取り出した。

図鑑の説明文に好奇心旺盛とちやんと注釈が入っている。

どうやらそういうポケモンらしい。

俺は図鑑を仕舞って分類まめだぬきな野生のポケモンに戦いを挑んだ。

ウインディは威嚇してたのに今は落ち着いてる。

俺に野生のポケモンが近づいてることを知らせるために威嚇してたのかな。

腹を撫でウインディに指示をだした。

「ウインディ。にどげり」

ウインディが駆けジグザグマの傍まで近づくと真上に飛び上がった。

ジグザグマはウインディを見失ったのかキョロキョロと見回す。

戦闘態勢に入っていないところへウインデイが真上から2度踏みつけ距離を開けた。ジグザグマは倒れて起きる様子がない。

え……終わり?

信じられなくて俺はジグザグマを思わず2度見してしまった。

やっぱり動かないよな……

ジグザグマは目を回し戦闘不能に陥っていた。

なんか無抵抗なジグザグマを急襲した格好になり心が痛い。

俺はウインデイとの間に流れる気まずさを取り成すため「先を急ごう」と促した。

2日掛けてようやく目的地であるコトキタウンに着いた。

均されてはいるが舗装されていない道。

慣れ親しんだミシロタウンと同様長閑な家並み。

現在は日が暮れかけ部屋の中からは家に帰る人がちらほらと見えた。

俺はコトキに着くとまずは道中野生のポケモンとの戦闘をいくつかこなしたウイン

デイをポケモンセンターに預けた。

次にフレンドリイショップでモンスターボールと薬を必要分買い込み宿を取った。

用事が全て施設内で済んだことに便利だなと関心したがミシロにも早くこんな施設ができればと嘆いた。

そういえば母さんがこういう複合施設をミシロに建てる計画を耳に挟んだと最近話してた気がする。

そんなことを思い出しているとポケモントレーナーの登録をしてないことに気づいた。

俺は慌てて部屋から飛び出し1階にあるポケモンセンターへ向かった。

ポケモンセンター受付へと辿り着いた俺はジョーイさんを探す。

さして時間は掛からず看護服が視界に入った。

ジョーイさんは奥で飲み物を手に座っていた。

見た感じ休憩中みたいなので遠慮なく声を掛ける。

「すみません。ポケモントレーナーの登録がしたいのですが今からできますか？」

呼び掛けるとジョーイさんは慌てて奥から顔を出した。

「え、あ、はい。大丈夫ですよ。手続き致しましょうか？」

「お願いします」

「確認ですがポケモン図鑑はお持ちになってますか？」

「はい」

そう答えたら彼女は「少々お待ちください」と断り奥に引っ込んだ。

仕事の合間の小休憩中だったろうに嫌な顔せずにこやかに対応してくれた。
天使だな。

そんな下らない事を考えてると準備が出来たのか「こちらへどうぞ」と呼び声がしたのでその声に応じて奥に向かった。

奥の部屋で顔写真を撮った後ジョーイさんが書類とペンを手に持ち受付カウンターにやってきた。

「こちらの書類に記入したら声をお掛け下さい」

ジョーイさんはニコリと笑み再び奥に戻っていった。

俺は渡された書類の空白欄に名前、性別、生年月日、住所等を埋める。

日が暮れた施設内では俺がペンを走らせる音と施設内の設備動作音が響くのみ。

書類の空白欄が少なかったので早々に書き終わりジョーイさんと呼ぼうと顔を上げる。

するとずっと待ってたのだろうかジョーイさんが既に目の前にいて少し吃驚してしまった。

「終わりました。これで良いですか？」

「問題ありません。ではポケモン図鑑を」

ジョーイさんは俺から受け取ったポケモン図鑑を端末装置の上に乗せると受付カウ

ンター上のパソコンを操作した。

「ミキ君はハウエンリーグ出場希望ですか」

「はっ」

答えに応じてジョーイさんのキーボード上の手が滑らかに動く。

手は直ぐに止まりポケモン図鑑を端末装置の上から取ってすぐに返してきた。

「このポケモン図鑑はミキ君の身分証明になります。それとあちらの入り口近くに置かれてるパソコンに図鑑を翳して頂ければポケモン転送サービスを受けることができます。もし図鑑を紛失してしまったらポケモンセンターにご連絡ください。その場合はミキ君の手元に戻るまで利用停止処置を施します。大まかな説明は以上になります。ご質問はありますか？」

「いえ。大丈夫です。ありがとうございます」

ポケモン図鑑を仕舞いトレーナー登録手続きが終わった俺にジョーイさんが待つてましたと脇に控えてたラッキーを促した。

看護服を着たラッキーがモンスターボールを乗せたトレーを差し出してくる。

「お待ちどおさま。お預かりしたポケモンは元気になりました。またいつでもご利用くださいませ」

ジョーイさんの決まり文句に意表をつかれた俺はどうか「ありがとうございます」

と言葉を絞り出した。

それから震えた腕でウインディの入ったモンスターボールを掴む。

……ジョーイさん仕事速すぎやしませんかね。

第2話 才能

背の低い建物が並べられた土地。

地を照らすぼかぼかとした朝の陽射しを浴びて行き交う人とポケモン。

そんな長閑なコトキタウンのオーブンテラスの一角。

現在俺はカフェで朝食に勤しんでいた。

濃厚でさっぱりとした相反する甘さが同居した蜂蜜。

それをたつぷりと塗った丸い生地。

ナイフとフォークを使って切り分けてた最後のひとかけらを頬張った。

爽やかな甘さと食べ物の温かさが口いっぱいに広がる。

コトキに来るまで缶詰ばかりだったから生き返るようだ。

食べ終わり紅茶を口に含み一息つく。

そして食休みのついでにミシロからコトキまでの道のりをふりかえった。

道すがら野生のポケモンとのバトルが何度かあったのだが全く歯ごたえがなかった。

これでは自分のポケモントレーナーとしての実力がどの位置にあるのかいまいちわ

からない。

そもそもミシロタウンを発つまでポケモンバトルを実際にやったことがなかった。

それというのも近所にトレーナーが居なかったからトレーナー同士のバトルができなかった。

それならとミシロから出ようとしたら母さんに危ないと注意されウインデイと一緒に野生のポケモンと戦うことも叶わなかった。

それでも一人と一匹でどうにか工夫してトレーニングはしてきた。

だからこそ自分の実力を知るためにトレーナーを探してただけ……道中とんと見当たらなかった。

ミシロは何もない田舎だから誰も来ようと思わないのかな。

でもコトキタウンからトウカシティに行く途中にはトレーナーがいる……はず。

だってトウカにはジムがあるし近くにトレーナーがいないとおかしい。

……いるよね？

コトキタウンを周遊した俺はコトキの北にある103番道路でウインデイと一緒に日向ぼっこをしていた。

今の時期ならありがたいハウエン地方特有の陽射しに草原をサラサラとゆらす風。それと風にそよぐ林から流れる耳に心地よい音色。

気持ち良い……

旅を始めたばかりとはいえ今までの疲れが癒されるようだ。

しばらく過ごしていると不意にウインデイが喉を鳴らし始めた。

警戒してるのだ。

ウインデイにしてはめずらしいと内心首をかしげるもだんだん覚めてきた頭が妙だと訴え始める。

思えば今いる場所は103番道路だし野生のポケモンが出てもなんらおかしくない。

答えにたどりついた俺は慌てて跳ね起きた。

そこにはシャワーズがいた。

最初は誰かの手持ちかと思ったがそんな様子は見られない。

なんとというか野生のポケモン特有な行動……つまり威嚇してるのだ。

念のためポケモン図鑑を出して確認すると名前の横に誰かが所有してるポケモンであることを示すマークがない。

人のポケモンではないようだ。

イーブイ種はなかなかお目にかかれないんだけどな。

そう思って俺は捕獲にかかった。

ウインディは炎タイプで目の前のシャワーズは水タイプ。

最悪なタイプ相性だ。

一撃で戦闘不能に追い込み手早く捕獲しよう。

そう思ってウインディへ指示をだす。

「ウインディ。かみなりのキバ」

ウインディがシャワーズへ狙いを定め駆ける。

口の端から覗くキバが電気を帯びてバチバチと漏れて線を引く。

ウインディは反撃を許さぬ速度で近づくと今だ威嚇してた標的の首へその容赦のな

いキバを突き立てた。

口に咥えられたシャワーズは初めこそ藻掻いてたが次第に動かなくなっていく。

それを確認したウインディは頭を振って口から放り出す。

堪らずシャワーズはもんどり打って倒れた。

一瞬シャワーズが過剰攻撃で死んだのかと思って立ち尽くした。

——早く捕獲しないと

我にかえり腰のベルトから速やかにモンスターボールを取り出してシャワーズへ投擲する。

狙い変わらず目標に当たったモンスターボールが真つ二つに開きシャワーズを赤い光に変換し姿までもを崩して吸い込んだ。

地面の上に落ちたボールがゆれる。

1秒が3秒にも思える時間のあとポンという電子音と共にモンスターボールは動かなくなった。

俺は野生のポケモンを初めて捕まえた。

シャワーズが入ったモンスターボールを回収していると背後から拍手の音が聞こえふりむく。

「すごいね君のウインディ」

意外な人物を認めた俺は驚愕で頭が真つ白になってしまった。

前世では見たことのない紫苑色の髪に瞳。

それが映える中性的な外見。

ふりむいた俺の目に映ったのは現バトルタワー主でありハウエン準チャンピオンでもあるリラだった。

忙しいであろう人物がどうしてここにいるのか俺の頭の中はその考えでいっぱい

なる。

「どうかしたの?」

「いえ。こんな場所でリラさんに会うとは思ってもみなかったので」

驚愕から立ち直りなんとか返した。

「ボクのこととはリラで構わないよ。それに敬語もいらぬ。歳近いでしょ? そんなことより君の名前は何て言うのかな?」

「俺はミキつて言います。ミシロタウン出身です」

リラは「へえ」と呟きまた俺とウインディを見る。

外見以上を押し量られてるみたいで居心地が悪い。

「このウインディはミキのポケモンだよ。えつと……ミキはポケモントレーナー?」
「そうです」

「トレーナーならミキはホウエンリーグを目指してるの?」

「次のリーグを目指してます」

「それは楽しみ。ねえ。ミキのウインディちよつと触ってもいい?」

「別にいいですけど」

どうして? 最後は心の中で独白になった。

その後はリラがウインディを撫でたり顔を埋めたりしてる状況をただ眺めるだけに

なった。

親しくない相手に触られるのが嫌なウインディにしてはめずらしくそんなに嫌がってないようだ。

何故リラはウインディを触りたがったのだろう。

……獣毛が好きなのかな？

ウインディを愛でている？ リラを見つめると今の状況が好機だと気づいた。

リラとポケモンバトルできたら勝敗に関わらず良い経験になるんじゃないか。

それにリーグ経験者とバトルができる機会なんて滅多にないのでは。

そう思ったなら自然と言葉が口から漏れていた。

「あのさりら。俺とバトルしてくれないか」

「ミキとボクが？」

ふりかえったリラは人差し指を自分に向けて吃驚した様子。

「そんなに時間は取らせない。1対1でバトルしよう」

リラは俺の申し出を聞いて黙考したあと「いいよ。やろう」そう快く了承してくれたのだった。

俺とリラは対峙していた。

下には風に揺れる草の絨毯が見上げると日が沈み始めた赤焼けの空。そんななかでリラがモンスターボールを投げる。

「Go! Myフレンド!」

出てきたのはコジヨンド。

オコジヨな風貌のポケモン。

「エーファイで戦わないんですか?」

「うん。エーファイはちよつと消耗してるから」

残念。

昨年のホウエンリーグでリラの主軸ポケモンだったエーファイとやってみたかった。

「ではこちらからいきます。ウインディ。こうそくいどうからおにび」

ウインディはコジヨンドを中心に弧を描き背後をとると口から球状の炎を吐き出した。

「ふふっ気が早いね。コジヨンド。おにびを見切つてストーンエッジ」

リラの指示を受けたコジヨンドは迫る炎をギリギリまで引き付けてから躲しその一連の動作の中で自身の拳を地面に振り下ろした。

すると岩の針が地面から無数に突き出しウインディを——襲うことはできなかった。

ウインディは攻撃が来ることを見越してその場から飛び退っていた。コジョンドのストーンエッジ。

今のはまるで岩の剣山だ。

技のタイプ相性とコジョンドの攻撃種族値を鑑みればウインディに一撃でも当たれば致命的。

バトル序盤にこうそくいどうで素早さを上げてたのが幸いした。

「ミキのウインディやっぱり凄いな。久しぶりに楽しくなってきた」

頬を緩めてウインディを賞賛するリラ。

何かに飢えてたのだろうか俺にはわからない。

それよりこの状況を打開しなければ。

「しんそくからのおにびだ」

ウインディが目にも留まらぬ速さでコジョンドに迫り勢いに乗った前足を鋭く振るい振るった。

ひらりひらりと踊るようにかわすコジョンド。

でも次第にかわすのが厳しくなり腕で防がざるえなくなつた。

——防いだ

そこに狙い澄ました追撃が入る。

逃れることのできないゼロ距離でウインデイは口から炎を吐きだし浴びせた。コジヨンドはどうにか離脱して体制を整える。

しかし火傷を負ったのか動きに精彩が見られない。

これでコジヨンドの物理攻撃力が下がりウインデイに対しメインの攻撃技になるだろ。うストーンエッジととびびぎげりの威力を削いだ。

最初にいかくも与えてるからいかくで1段階おにびで2段階と合計3段階下げている。

状況はこちらが優勢……かな。

じれたのか睨み合いからコジヨンドが口火を切った。

ウインデイに無数の星を放ち牽制それから自身は目を閉じ静止する。

めいそうか？

やばい。

止めなければ。

「ウインデイ。かえんほうしゃのあとつばめがえし」

ウインデイは炎を吹きそれと平行して地を這うように相手に接近した。

ウインデイが無数の星を薙ぎ払いコジヨンドの懐へ飛び込み交錯。

前足で切り裂く。

ウインデイの攻撃は直撃した。

だが攻撃が直撃したそれはコジヨンドではなかった。

気づいた時には後の祭り。

敵を打ち損じたウインデイの側面から巨大な玉が襲いさけられず派手にぶっ飛んだ。ウインデイは空中で強引に体制を立て直し足から着地する。

ダメージは見受けられない。

コジヨンドのみがわり。

いつ成り代わったのか全くわからなかった。

それに戦闘で初めてウインデイが攻撃を受けた。

リラは強い。

今まで戦った野生のポケモンと比べるのがおこがましくなるほど。

この対戦を台無しにして仕舞わないように確りと応じる。

あちらが搦め手ならこちらもそれに対抗しよう。

目には目を歯には歯をだ。

「ウインデイ。かえんほうしゃのあとつばめがえし」

前と同じ指示。

それでも長年一緒にいるウインデイなら俺の意図を察してくれるはず。

ウインデイの行動は前と変わらず同じ映像を繰り返す様で炎を吹き自らの姿を遮りコジョンドの懐に飛び込んだ。

その間コジョンドが黙ってる訳がなく。

接近のタイミングを計ってたように目を開き両手の平に圧縮した球体で炎を吹き飛ばしそのままウインデイの体に捻じ込んだ。

互いの攻撃は至近距離で行われた。

故に両者さけること叶わず直撃する。

各々ポケモンの攻撃は凄まじくそれぞれ地面を転がった。

攻撃の余波で煙が立ち込める。

ここから視認できるのは3つの影のみで俺とリラはその場を無言で見つめた。

どうやらウインデイのみがわりは上手くいったようだ。

それでもコジョンドの攻撃は本物のウインデイごと巻き込んだようだけど……

2人が見つめる先でみがりである1つの影が消えた。

ようやく煙が晴れ全てが見通せるようになると状況がわかった。

バトルフィールドとなった草原中央は球状に抉れその穴の傍にはウインデイが立っている。

そう立っていた。

リラのコジョンドはいつまで待っても起き上がってこなかった。

バトルに負けたとは思えない晴れやかな表情で握手を求めるリラ。

俺は差し出されたその手を握り返した。

「まさか負けるとは思わなかった。ミキありがとう。久しぶりに楽しかった」

俺も勝てるとは思わなかった。

途中からはリラがホウエンリーグ準チャンピオンだとかそんなことはどうでもよくなり勝利するために動いていた。

「俺も楽しかったよ。それに今後に活かせるバトルだった。それとトレーナー戦は初めてだったんだリラが相手でも……なんだろう？ ……うれしかった？ ……いや違うな……運が良かった？」

「……はじめて……初めて？ 今のバトルが？ 本当に??」

リラは驚愕の表情を浮かべ俺とウインディを見る。

ウインディがその問いに答えるように澄まし顔だ。

「本当、なんだね」

俺が答える前に勝手に納得されてしまった。

今のリラの様子だとまるでウインディの言葉が心がわかるようではないか。

考え込んでると目の前のリラがクスクスと笑いだした。

「面白いよミキ。ボク、トレーナー戦が初めての人に負けるなんて思わなかった。やっぱりミキに話し掛けて正解だった」

「ど、どうも」

「次のハウエンリーグの楽しみが一つ増えたかな」

リラが楽しそうに呟く。

そこまで評価してくれるのは嬉しい。

でもいまだジム戦すらしてないんだよな……

「まだリーグに参加できるかわからないよ」

俺は苦笑して返したがリラの真剣な眼差しに射竦められ二の句を告げなくなってしまう。

「来るよ。ミキは来る。絶対だ。ボクにはわかる。ミキ、ハウエンリーグで君を待っている」

最後のセリフを残してリラは去っていった。

リラは本気ではなかったかもしれない。

彼女は切り札の1体であるエーファイでバトルをしなかった。

なにより最後に浴びた彼女の眼差しが対戦中のものとかけ離れていた。そういえばリラにポケモンの言葉がわかるのか訊きそびれてしまった。

彼女はバトルの途中からコジョンドへ全く指示を飛ばさなかった。

さらに言えばあの時ウインデイがリラに返答してたよな。

そう思つて隣のウインデイを見た。

多少ダメージはあるようだがそこにはいつも通りの気取ったウインデイがいた。

第3話 切っ掛け

晴れた昼なか。

燦々とかがやく太陽に自然の息吹あふれる草原。

それと体を過ぎるさわやかな風。

私は自転車を走らせていた。

そろそろ旅立つ私に、パパがポケモンを渡した。

その初めてのポケモンと親睦を深めるため、ハウエンの雄大な自然の中に出て来た。た。

この辺りでいいかな。

私は視界が開け、周りの景色を一望できる広場になっている場所を選び、ペダルを漕ぐ足を止め、自転車を邪魔にならないよう道の脇に停めた。

広場の周りを窺う。

ちよこちよここと立つ木々に、スバメの群れが止まり、羽を休めていた。

視線を下に向ければ、ジグザグマやニドランもいる。

ニドランは縄張り意識が強かった気がする。

私はニドランを刺激しないようにそろりそろりと歩いた。切り株の傍に着くとその上に持参した弁当を広げてからやわらかい草の上に座りおちつく。

準備が終わった私はモンスターボールを腰のポーチからひっぱりだし先日パパからもらったポケモンをよびだす。

ボールから出たアチャモはキョロキョロと周りを見渡した。首の動きに合わせて頭のトサカがゆれている。

「アチャモ。いい天気でしょう。今から一緒にご飯食べよ」

「チャモー」

アチャモが喜んで私の誘いを受けてくれた。

遠出したのは正解だったかも！

嬉しそうに小さな翼をはためかせるアチャモを眺めながら私は幼いころの記憶を思い出していた。

幼い私は海水浴場で浮き輪と共にゆられ楽しく泳いでいた。

そこへメノクラゲの群れがこちらに漂ってくるのに気づく。

幼い私がメノクラゲの危険性などわかる訳がない。

メノクラゲの群れと合流した私は一緒に泳ぐのがおもしろくてはしゃいでいた。

そこまでは何も問題なかった。

——ママのミツコが現れるまでは

私がメノクラゲと同じ色の水着を着たことがわかったのか。

ママは幼い私をメノクラゲと間違え捕まえようと……もう……思い出したくない……。

他の人が聞いたら笑い転げてしまうだろうけど当時の私は本当に怖かったのだ。

ママがメノクラゲと間違え私を捕まえようとしたのは。

その体験から幼い私はポケモンに近づくと何か怖いことが起こるのかもしれない。

そんな思いに駆られいつしかポケモンに対して苦手意識を抱くようになってしまった。

そんな私に転機が訪れた。

パパが私にアチャモを渡したのだ。

私が旅をしたいとパパに告げてから数日後のことだった。

パパは知り合いのオダマキ博士から受け取ったと言っていた。

けど私はそんなことより手渡されたモンスターボールを不安にゆれる心で見つめていたのを覚えている。

その不安はアチャモとふれあう事ですぐ杞憂に終わったけど。

そのアチャモはとうとなにを慌てているのかポケモンフードを急いで食っていた。アチャモは皿の中を何度か啄ばみ顔を上げて嘸下する。

それから首を左右に振り見回す。

——ご飯を奪われると思つて警戒してるのかな？

そして思いだしたように隣の水をつつつく。

——そんな急いで食べなくても……

アチャモの様子を見ていたら私の口から自然と笑みが零れた。

アチャモと自然の中で交流作戦が上手くいった私は鼻歌交じりで家路についていた。トウカシテイに着きそろそろ自宅の屋根が見える頃。

最近は日常になったトウカジムを多くの人が入りする光景が目に入った。

この時期はホウエンポケモン協会が今年のホウエンリーグ出場登録を受付始める。

だからなのかリーグ参加を狙う人達がジムバッジを求め各地のジムへ押し寄せてくる。

今日はどんな子が来てるのか気になった私。

様子を見るため自宅に自転車を置いてから裏手にあるトウカジムへ周りジムの受付

を窺った。

見えたのは1人の女性と3人の男の子。

女性の方はトウカのジムトレーナーサオリさん。

男の子3人はトウカジムへの挑戦者だろう。

それぞれが予約受付端末にポケモン図鑑を翳してジムへの挑戦手続きをしていた。

トウカジムに挑戦する際の予約手続き内容は

いつ戦うのか？

ジム戦で使うポケモンは？

この2つが問われる。

ジム戦を希望する人はまず予約受付端末を操作して空いている時間を探す。

その中から自分の希望時間を選択して予約を入れる。

それからジムで戦う2体のポケモンを選出。

そのポケモンのジム戦で用いる技を最高4つまで選び登録。

トウカジムへの予約はそんな流れになっている。

どうしてそんな手続きを踏むのか。

パパから聞いた限りでは主に理由が2つあるらしく。

1つはジムリーダーのポケモンが連戦に耐えられないこと。

もう一つは挑戦者のポケモンを予め知ること。ジムリーダーが挑戦者の力に合った戦いをするためだつて。

パパ曰くジムはポケモンリーグへの登竜門でありただの通過点でもある。

ジムリーダーが挑戦者の実力をはかるのは当然でそれも踏まえてポケモンとトレーナーの絆や挑戦者の人柄などいろいろな要素を見極めてジムバッジを渡すに相応しいか判断しているらしい。

だからジムリーダーのお眼鏡にかなわなければ実力行使で……なんてこともあるみたい。

ただし挑戦者に負けてしまえば規則としてジムバッジを渡さなければいけないんだけどね。

ジム出入り口の自動扉が開き一人の男の子が出てきた。

その子はそのまま帰らずにジム受付の方をそわそわと落ち着きなく窺っている。

予約している男の子を待っているようだった。

知り合いなのかな？ 会話してる様子は見受けられなかったんだけど……。

しかし男の子か女の子かわかりにくい子。

中肉中背の中性的な容姿に烏羽色な短髪。

髪を短くカットしてるから男の子だと辛うじて見分けることができた。

たぶん私と同一年だよ。

その彼が出てきた男の子に声を掛けた。

「えっと……俺の名前はミキ。突然だけど俺とポケモンバトルしてくれないか」

「いいだろう」

——そんな会話から始まったバトル——

それはトウカジム入り口前に設けられた草のバトルフィールドで行われた。

草のフィールドはポケモンリーグでもよく使われる障害物のない平面なフィールド。

私は観客よろしくと対戦フィールドの傍に設置されているベンチに腰をおろした。

ミキと名乗っていた彼からはシャワーズが対戦相手の男の子からはドクログが投

げたモンスターボールから飛び出てきた。

少しのあいだ睨み合う2匹のポケモン。

バトルはドクログが動くことで始まった。

「ドクログ。クロスチョップ」

「シャワーズ。オーロラビームからとける」

ドクログがシャワーズへ接近する。

その進行方向にシャワーズが冷気の線を穿つ。

ドクログの足元がゆっくりと凍っていった。

それを見とめたドクロググは何度も方向転換を繰り返し接近を試みるもそこへ悉く降ってくる冷気の線。

シャワーズへ至る道が幾度も潰された。

シャワーズが近寄るドクロググを妨害している。

こんなシャワーズ初めて見たかも。

ドクロググが攻めあぐね主人の指示を待っている。

その隙にシャワーズは体表を水で覆っていく。

「ドクロググ。ヘドロばくだん」

彼は近づけないと悟ったのか行動を切り替えてきた。

ドクロググの周囲に黒い球体がいくつも現れそれをシャワーズに打ち出してきた。

「シャワーズ。スピードスター」

シャワーズは星を操ってドロドロな玉にいくつもいくつもぶつける。

でも打ち落とす度に視界を覆う煙がどんどん厚くなっていた。

その煙を隠れ蓑にドクロググがシャワーズに突っ込んでいく。

「どくぐぐき」

勢いを乗せた左拳がシャワーズを突く。

「まもる」

慌ててシャワーズは寸でのところで防御膜をはる。

「クロスチョップ」

「でんこうせっかで離脱」

しかし流れるような連撃がシャワーズを捉えた。

シャワーズは吹き飛ばされ芝の上を転がった。

すごい威力。

シャワーズがとけるで体表をぬめらせ力を受け流してダメージを抑えていなかったから致命的だったかもしれない。

それでもシャワーズのダメージは小さくないらしく足をふんばりどうにか立ち上がった。

「シャワーズ。ここへ来るかぜ」

「避けてもう一度クロスチョップ」

シャワーズの口から冷気を纏った風が流れる。

ドクロックは目を細め顔の前で腕を交差し踏みとどまり耐えた。

——バトルは終わりへと突き進む

「今だ！ ドクロック！」

ドクロックがジグザグにステップを踏みシャワーズの頭上へ躍り出る。

「かわらわり」

「オーロラビーム」

シャワーズの攻撃が今まさに技を繰り出そうとしているドクロッグのふりかぶる腕に直撃して凍らせていく。

しかしドクロッグはなんのこれしきとばかりに凍りつく腕をそのまま振り下ろした。

凍った腕がシャワーズの脳天を捉える。

地面に叩きつけられたシャワーズはピクリとも動かなくなつた。

「もどれシャワーズ。ありがとう参考になつた。……そういえば君の名前は？」

負けたミキが握手を求め彼の前に手を差し出す。

彼は握手に応じず。

「シンジだ」

そう名乗つてから勝利した彼、シンジは軽い足どりで去っていく。

ミキが慌てて「シンジ！ 今度リベンジさせてくれよ!!」と声を掛けると手を挙げ応えていた。

バトルのあと握手に応じなかつたし目つき怖いしシンジって男の子なんか感じ悪いかも。

シンジを見送り草のフィールドに目を戻す。

負けたミキは俯き立ち尽くしシャワーズを戻したモンスターボールを握り締めていた。

私はモンスターボールを持つその腕が震えているのに気づく。

バトル直後は悔しそうな素振りさえ見せなかったのに……人前だから何でもない風を装っていたのかな？

でもここに私がいるんだけど……。

——まさか私がかここにいるの彼は気づいてない？

ま、まさかね……そんなことあるはずない。

もしそうだとしたら断りもなく勝手にバトルを観戦していた私が悪いのだろうけど。

そのことはとりあえず脇に置き私は不躰ながらミキをぼんやりと眺めた。

今のバトルは駆け出しトレーナーの域を超えていたのではないか。

少なくとも私にはこんなバトルできそうにない。

2人共ポケモントレーナーを始めたばかりの新前じゃないよね。

そうだよね？ そうじゃないと私の何かが折れそう。

私はミキに近づいていく。

ミキにバトルを申し込んだら受けてくれるだろうか。

正直に言うとうバトルを見ている最中うずうずして堪らなかった。

同じ年頃の子と一緒にバトルしているのを見て感化されたのかもしれない。たまに覗いた。パパのジム戦ではこんな気持ちにならなかったのに……。

ポケモンバトルは初めてだけど、パパのバトルを時々観戦していたから多分大丈夫……たぶん。

私は意を決して芝の上に佇む彼に声を掛けた。

「あの。すみません。私とポケモンバトルしてくれませんか」

近寄るこちらに気づき視線を投げかけるミキは落ち込んだ様子を微塵にも感じさせなかった。

そして私が声を掛けた途端に彼は力の籠った視線をぶつけてきた。

「ミキ」

彼、ミキがモンスターボールから出したのはリオル。

何が珍しいのか頭を忙しく動かし周囲を見渡している。

小さくてかわいい。

ミキに倣い私もバトルフィールドの端に寄ってモンスターボールを投げる。

ボールから出たアチャモは力強い鳴き声を発した。

やる気満々だ。

私の初めてのポケモンでミキに挑む。

私とミキは草のバトルフィールドでポケモンを挟み向きあう。

ふと息苦しさを感じた。

バトルを外から見ていたのと違うこの対峙してわかる体の重さは私の緊張から？

それとも……。

目の前には先ほどまで沈んでいた彼とは別の真剣な眼差しのミキがいる。

この感覚はミキから?!

私は鳥肌が立つのを自覚した。

なんだろうゾクゾクする。

ミキはリオルを呼び出したあと突っ立ってこちらを見てるだけ。

どうやら待ちの姿勢みたい。

それなら私から仕掛ける。

私は重苦しさを感じながらもアチャモに指示をだした。

「アチャモ。ひのこ」

「リオル。しんくうは」

アチャモが嘴を開き火の玉を数発吐き出す。

それを受けて正面のリオルがこちらに向けてパンチやキックを振るった。

……何をしているのだろう？

私の疑問は答えとなって即返された。

リオルに向かっていた火の玉が掻き消されたのだ。

それも的確に自分に当たるだろう火の玉だけを選択して消してきた。

リオルは拳や足で目に見えない衝撃波を生みだし火の玉に当て吹き飛ばしたのかな。

私は動揺を考えることで抑えた。

でも今はバトル中でミキが私の立ち直りを待つてくれるはずもなく私のとつたその行動は致命的な悪手になってしまった。

リオルがアチャモの火の玉を消すことによって築いた道を使い真つ直ぐこちらに迫ってくる。

「スカイアツパー」

「アチャモかわして!!」

私は必死でアチャモに声を張り上げる。

それを嘲笑うかのようにリオルの勢いを乗せた拳が天高く掲げられた。

リオルの拳はアチャモの顎を精確に打ち抜いていた。

踏んばりきれずアチャモは空中で一回転して仰向けに倒れる。

アチャモは立ち上がらない起き上がれない。

そんな、嘘、負けたの？ そうだとしたら、なんて呆気ない。

私は呆然としてやがて膝から崩れ落ちた。

勝敗なんて気にせず挑んだ。

だけど、だけでも、この言い表すことのできない感情はなんだろう。

いつの間にかミキは去っていた。

私に一言もなく。

その気づかいが今はありがたい。

私は芝の上で仰向けに寝転がった。

——悔しい——

眦から零れた涙。

それが顔に筋を作ってくけど構わず空を眺める。

小さな厚い雲の塊が1つ2つと太陽を過ぎっていった。

私の心と違って雲はあるが良い空模様。

不意にふわりとした感触を顔に感じて目を移す。

アチャモだ。

私の顔に描かれた涙の筋を拭ってたどたどしくも慰めてくれてるみたい。

「ありがと……アチャモ」

笑い掛け頭を撫でる。

アチャモはバトルのダメージが残っているだろう。

私と同じで悔しいだろう。

それなのに力強く鳴いて応えた。

私はアチャモを正視できずにまた空の移ろう様を眺めた。

アチャモの持ち主としてこんな情けない顔は見せられない。

私は胸に残るこの悔しさが過ぎるのを待った。

暫し時がたち、心に残った、灯った感情。

それはミキへの対抗心だった。

アナタに追いついてやる！ 見ときなさいミキ！！

「アチャモ！ 一緒に強くなってミキを驚かそう！！」

私の鼻息荒く吐いた言葉にアチャモはまたも力強く鳴き応えてくれた。

なんのことはない。

アチャモは私なんかよりずっと強いみたい。

私はそれに見合うトレーナーにならなければいけない。

決意を胸に見上げた先は雲一つない晴天に変わっていた。